広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『ロクサンドラ』における帝都ギリシア人 : 多民族共存の街、ギリシアの街の住民たち
Author(s)	福田, 耕佑
Citation	プロピレア , 29 : 32 - 57
Issue Date	2023-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054845
Right	Copyright (c) 2023 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	

論　文

『ロクサンドラ』における帝都ギリシア人

── 多民族共存の街、ギリシアの街の住民たち ──

福田　耕佑

大阪大学大学院人文学研究科外国学専攻
特任研究員（常勤）
日本学術振興会特別研究員（PD）

1. はじめに

本稿はマリア・ヨルダニドゥの小説『ロクサンドラ』より、ここに描かれるイスタンブルがビザンツ帝国以来の自民族の精神的中心地という「ギリシア人の街」と、ギリシア人もその内の一つに位置づけられる「多民族・宗教共生の街」という一見矛盾する様相をもった街として描かれていることについて、加えてイスタンブルのギリシア人の自己意識について論じたい。この目的のため、本作に描かれるトルコ人と西欧人、そしてギリシア本土のギリシア人の表象を分析し、彼らの共通点と相違点の比較の中でイスタンブルのギリシア人の独自性というものが描かれていることを確認する。

以下第二章ではイスタンブルのギリシア人共同体という少数派に関して先行研究を挙げつつ本稿の背景を設定する。続く第三章では著者のマリア・ヨルダニドゥの生涯について簡単に記し、次いで第四章で『ロクサンドラ』の本論分析を行う。なお、トルコ共和国に位置するイスタンブルはギリシア語では「コンスタンディヌポリ」（Κωνσταντινούπολη）或いは「ポリ」（Πόλη）と呼称されるが、本稿では以降日本語においてこの街を「帝都」と表記する。

2. 帝都ギリシア人

中世ビザンツ帝国期におけるギリシア人の呼称が「ロメイ」（Ρωμαιοί）であり、これは原義的にはローマ人(Romani)であるが、第一にローマ帝国の臣民で

あり「新ローマ」である帝都の市民であるという意識、第二に正教徒であるという意識、第三にギリシア語話者であるという意識を含意している[1]。後のオスマン帝国統治期においてはミレット制のもと、ギリシア語を話す正教徒たちはルーム（Rum）、すなわちローマ人と呼ばれた[2]。正教徒たちは自身をロメイやロミィ（Ρωμιοί）と習慣的に呼称し、自分たちの口語、話し言葉をロメイキ・グロッサ（Ρωμαίικη γλώσσα）やロメイカ（Ρωμαίικα）と呼び、そして集合的にギリシア人やギリシア人共同体、そしてギリシア性にあたる言葉をロミオシニ（Ρωμιοσύνη）と言い慣わすなど、ローマ帝国に由来する自称を用い続けた。このオスマン統治期におけるギリシア人の中心地は依然として帝都であり、オスマン帝国に仕えたファナリオティスや教会の聖職者たちによってこのロメイという意識は強固に保存されると共に、ギリシア語による多くの作品が産み出された[3]。

十九世紀にフランスから啓蒙主義が流入し、ギリシア人の呼称を中世的な「ロメイ」ではなくより古代ギリシアを意識させる「エリネス」や「グレキ」を用いるべきだという論争が広げられたが[4]、とりわけオスマン帝国の統治下にあった帝都のギリシア人たち、或いは小アジアのギリシア人たちはオスマン帝国から独立した本土のギリシア人たちとの区別において特に自分たち或いは東方のギリシア人を「ロメイ」と呼称し、本土或いは西方のギリシア人を「エリネス」（Έλληνες）と呼称することを好んだ[5]。デミリュズの研究によると、とりわけオスマン帝国に対する 1820 年の独立戦争とギリシア独立以降、トルコ語では本土のギリシア人はユナン（Yunan）、オスマン領の小アジアに住むギリシア人はルーム（Rum）と呼称されるとしているが、まさにこれに対応するものである[6]。

このギリシア本土のギリシア人の呼称と小アジアのギリシア本土の違いは現代の文学作品の中でも再生産されており、例えば 2017 年に出版されたイラクリス・ミラスの『家族の墓』においては、アテネに移住した帝都出身のギリシア人が未だ帝都に暮らしている娘に宛てた手紙の中で、

> お父さんが言っていることは他にもあるんですよ。「私たちには故郷など無い」と言っているんです。或いはもしかしたら自分たちが不確かな状況に置かれているということなのかもしれません。私たちは異なる場所から帝都にやって来ました。小アジアの奥深くから来た人もいれば、エ

ーゲの島々から来た人もいて、他にはイピロスから来た人もいます。私たちは自分たちがギリシア人【Ρωμιοί】であって帝都が故郷だと信じていました。少なくとも自分たちの最後の故郷だとね。今ではまたそこを離れてギリシア【Ελλάδα】にいます。ですがここには何の思い出もありません。この場所は私たちと何の関係も無いのです。子供の遊んでいる地区も両親の埋められた「おくつき」だって無い。「そういう場所を作って自分がどこに属しているのかを知りたいんだ」と言っていますよ。私は「でもあなたは自分が国際人だって言ってるじゃない、どうして故郷をほしがったりするのよ？」と言ってやっています。そしたらね、お父さんは前にね、俺のことをわかろうというつもりはお前にはないんだな、なんて答えたんですよ。この主題には苛まれ続けているのです[7]。

また娘が母に返信として宛てた手紙では、

お母さん。あなたが故郷に関して私に書き送ったことについて言えば、アレクサンドロスも似たようなことを言っています。おそらく私にもよくわかっていないんでしょうね。私たちにはここに墓があり墓地があります。ギリシア【Ελλάδα】で墓とか墓地と言われているものが、私たちギリシア人【Ρωμιοί】には「おくつき」【μνήμα】とか「奥城」と言われるようなものだということは思い出しておいてもらわないといけません。私たちのおくつきはここにあり、私が小さい時に通った小学校、それに私の地区、つまり子供だった時に遊んでいた地区というのがあります。私たちも帝都を離れることになるのかどうかは分かりません。でも私たちが帝都を離れるのだとしても、どこか他の場所に故郷を作ろうとは思いません。私たちは故郷を後に残して出て、単に故郷から出ていくだけです。故郷というのは、自分たちが作りたい時と場所に作られるようなものだとは思えないのです[8]。

と表現されており、ギリシア本土のギリシア人に対して Έλληνας / Yunan に当たる言葉が、そして帝都ギリシア人に対して Ρωμαίος / Rum に当たる言葉が用いられており、同じギリシア人ではあるが本土のギリシア人と帝都のギリシア

人を区別する言葉として機能している。他にも、マリアンナ・イェラシモスが帝都ギリシア人共同体に属する自身の家族についてトルコ語で執筆した作品は、2019 年に刊行された『あるイスタンブルギリシア人家族の料理の冒険 / İstanbullu Rum Bir Ailenin Mutfak Serüveni』であり、実際に帝都ギリシア人を指し示すのに Rum という言葉が用いられている。このように、殊に現在の文芸において帝都ギリシア人にギリシア人としての一体性の感覚はありつつも本土のギリシア人とは呼称において異なる自己意識が存在していることは明確である。

3. マリア・ヨルダニドゥ

本章では、コンスタンディノス・コンスタンティニディスの「マリア・ヨルダニドゥ：総主教座の貴婦人」に基づいて小説『ロクサンドラ』の著者であるマリア・ヨルダニドゥの伝記について記す。

マリア・ヨルダニドゥは帝都人の母親のマグ・エフフロシニとイドラ出身の父ニコラオス・クリエジスの子供として 1897 年に帝都で生まれた。幼年期を帝都とギリシアのピレアスで過ごしたが、両親の離婚後にギリシアから帝都に戻った。子供時代の教育としてはアルナヴトキョイのアメリカン・カレッジに通い、そこで英語を習得した[9]。この子供時代の経験は、1874 年から 1914 年までの帝都とアテネでの体験をもとに執筆された小説『ロクサンドラ』に反映されることになる[10]。

1914 年にはおじに招かれて休暇のためコーカサス地方に赴いたが、第一次世界大戦の影響で帰国ができなくなってしまい、当地で足掛け五年を過ごすことになった。そこではロシア人学校に通うことになり、ロシア語を習得することになった。この時の体験が小説『コーカサスでの休暇』に反映されることになる[11]。

1919 年に帝都に戻ってからはアメリカ人の会社で勤務するようになり、その後 1920 年にアレクサンドリアに転居した。その地で後に夫となる教育者のヨルダニス・ヨルダニディスに出会い、1923 年に結婚した。彼との間には一男一女をもうけた。アレクサンドリアにいた間の主な出来事としては共産党に入党し、左派知識人と多くの交流をもったことが挙げられる。アレクサンドリアの知識人サークルとは断絶することになってしまったのだが、1923 年にアテネに転居し、教師として働いた後に 1926 年から 1939 年までの間ソヴィエト大使館で勤務した[12]。ロシアから帝都に帰還した 1919 年から 1939 年のイタリ

アによるギリシア侵攻前までのヨルダニドゥの経験は『狂った鳥のように』という三作目の作品に反映されることになった[13]。

第二世界大戦による独軍の占領と食糧難の時代をアテネで過ごした。ドイツ軍によって政治的な理由からおよそ八カ月間捕虜として拘留されもした。自身の家屋も破壊されるなど生活の立て直しは困難を極めたが、再度教師業に従事することでかろうじて生計を立てることができた[14]。

二回の戦争によって生活に大きな影響を受けつつも戦間期と第二次世界大戦後を「職業人」として生きたヨルダニドゥであったが、彼女が初めて小説を執筆したのは『ロクサンドラ』を書いた 1963 年の 66 歳になってからのことであった。この小説の内容は本稿第四章第一節で紹介することになるが、本作は 1979 年に 30 話構成でテレビドラマ化され、また帝都に位置する正教の世界総主教座によって帝都のギリシア人の生を豊かに描写したことによって賞を贈られるなど、一般に高い評価を受けることになった。1941 年から 1961 年までのヨルダニドゥの個人的な経験や第二次世界大戦による飢餓とギリシア内戦といった歴史的な出来事は小説『サークルの手紙において』で描かれることになった[15]。

ヨルダニドゥは 66 歳で初めて小説を刊行した後、生涯において合計五冊の作品を執筆し、一冊目の『ロクサンドラ』は 1963 年に、二冊目の『コーカサスでの休暇』は 1965 年に刊行された。ギリシア軍事独裁政権が権力を掌握していた 1967 年から 1974 年までは小説の刊行は行われなかったが、三冊目の『狂った鳥のように』が 1978 年、四冊目の『サークルの手紙において』が 1979 年、そして五冊目で最後の作品『私たちの庭』が 1981 年 12 月に刊行された[16]。そして 1989 年 11 月にアテネでその生涯を終えた。

4.『ロクサンドラ』

本章では、小説『ロクサンドラ』を中心的に取り上げ、トルコ人と西欧人、本土ギリシア人の描写を帝都ギリシア人たちの描写と比較することで、本作における帝都ギリシア人の自己意識の描かれ方について論じていく。

主な先行研究について述べると、先に取り上げたコンスタンティニディスの研究が挙げられるが、これは『ロクサンドラ』の作品分析をしたものでもなければ本作に見られる帝都ギリシア人の自己意識の描写に関する研究を行ったものでもない。他にはマリア・ニコルプルの「空間と記憶と自己同一性。一九六〇年代のギリシア小説における小アジアの空間の記憶」(2007) などが存在する

も、これも『ロクサンドラ』を中心に論じた研究ではなく、管見の限り文学作品における、とりわけ『ロクサンドラ』における帝都ギリシア人の自己意識を中心に取り扱った研究は見られない。先述の通り本作は賞を受賞したりギリシア本国においてドラマ化されたりするなど、世間的には高い人気を獲得していた一方で、学術的な研究が十分になされていない状況にある。

4-1.『ロクサンドラ』のあらすじと主な特徴

本作は三部構成を取っている。第一部では 19 世紀後半のアブデュル・ハミト二世の時代が描かれる。この章ではロクサンドラの夫や子供たち、召使や隣人たちが紹介され、マクロホリという帝都郊外の村で展開された夫のディミトリスが亡くなるまでの物語が描かれる。この間にはヒオス島の虐殺で帝都に奴隷に売られた夫の話やクリミア戦争とサン・ステファノ条約という世界史上の出来事が描かれるが、マクロホリでの日常の描写が中心となっている。

第二部ではサン・ステファノ条約以降の帝都での混乱が描かれる。第二部ではロクサンドラたちは田舎のマクロホリから引っ越すことになり、帝都新市街の中心地であるペラ或いはスタヴロドロミ（ベイオール）という都市部での生活が、孫のアンナ誕生するシーンまで描かれる。作中の描写ではクルド人たちによる帝都でのアルメニア人虐殺（1894-1896）、そしてロクサンドラの家で雇っていたアルメニア人の使用人をかくまう話といった帝都で展開された歴史上の出来事にロクサンドラの家族が直接関わっている。

続く第三部では、およそ二十世紀の初頭から第一次世界大戦の勃発までが描かれる。作中の描写ではアブデュル・ハミト二世の「西洋嫌い」によりギリシア人に対する政治的な弾圧がロクサンドラたちの身にも降りかかってきたが故に、 一家はアテネに引っ越すことを決心した。こうしてアテネにあって帝都のギリシア人という外部の目を以て十九世紀末から二十世紀初頭のギリシア及びアテネでの生活と政治や社会の状況が描き出される。しかし本章第四節で見るように、結局ロクサンドラたちはアテネの生活に馴染むことができず自分たちの故郷である帝都に帰郷することになる。そしてロクサンドラの死の直後に始まる第一次世界大戦勃発までの家族の物語が描かれる。

本作品の主な特徴には以下のものが挙げられる。一つ目には先述の通り家庭の物語と政治情勢が絡み合っていることであるが、特に政治的にマイノリティーとして置かれていた状況を精緻に描き出したことが作中の帝都ギリシア人の描写をより現実性に溢れたものにしている。また数多くのトルコとギリシアの

料理、とりわけギリシア本土では当時馴染みの無かった帝都料理や衣服及び繊維の細かい描写、そして「シマンドロ」という正教徒たちを礼拝に招く昔の楽器の描写[17]やハマムに入る描写[18]などの昔の習慣を日常として描いた描写が登場している。加えて地の文の共通ギリシア語に対して特に会話文の中でギリシア語帝都方言やトルコが多用される。

これらの特徴を担う主人公のロクサンドラは、第一部では 30 代後半で、第二部では初老（難聴で大声）、そして第三部では 70 代後半から 80 代というように作中において年齢を重ねていく。豪快な性格の人物として描かれており、特に第二部以降は「時代遅れな老婆」という属性から喜劇的な効果を狙う描写が増えていくが、この主人公の周りに帝都ギリシア人や本土ギリシア人のみならずフランス人を中心とした西欧人、そしてトルコ人やアラビア人、クルド人やアルメニア人たちとの交流が展開され、ロクサンドラの家族の間、帝都人ギリシアたちの間での生活、そして帝都における多民族の人々との間、アテネにおけるギリシア人ではあるが外の人間としての生活が描かれていくことになる。

4-2. トルコ人

『ロクサンドラ』においてギリシア人、或いはロクサンドラのトルコ人との関わり方には大きく二つの類型が存在する。第一に、トルコ人はギリシア人と異質な存在であり、交わりのない存在として描かれる。第二に、第一の点と矛盾する形でトルコ人はギリシア人或いはロクサンドラと生活と習俗を共にし、交わりを有する存在しとて描かれる。

まずは第一の類型から見ていこう。トルコ人が決定的にギリシア人と異質な交わりのない存在として描かれる個所として第一部第二章に見られる記述が挙げられる（以下、引用の文中に引かれた下線は本稿執筆者による）。

> ディミトロスは、ビザンツの城壁が取り囲む旧帝都の中に鎮座するアヤ・ソフィアをかように見たのであった。そこには、ペラやガラタのような人々の往来と騒音、劇場や外国人もなかった。そこでは、生はゆったりと流れていた。細かく敷石のされた路地、刑務所の扉のような大きくて堅固な扉を持つ、木組みの小さな家屋。格子の窓、廃墟。象牙や琥珀、真珠といった商品の前に胡坐をかいて座っているせむしの東方商人

のいる市場。絹織物、インドはラホールのサリー、高価な香料。大気はパチュリの香りがしていた。

囲いのされたモスクの敷地ではトルコ人が座り込んで日光浴をしていた。大きな泉から水が流れ、その周りには鳩がいた。

そこにヨーロッパ人は一人もいなかったートルコなのだから。そしてスタヴロドロミにはトルコ人も誰一人いなかったーギリシア【Ρωμιοσύνη】なのだから[19]。

この個所に見られるように、トルコ人の場所とヨーロッパ人の場所というものが厳格に区別されている。そして「ヨーロッパ人は一人もいなかったートルコなのだから。そしてスタヴロドロミにはトルコ人も誰一人いなかったーギリシア【Ρωμιοσύνη】なのだから」に見られるように、ギリシアがヨーロッパの中に位置づけられることが前提とされたうえで、ギリシアもトルコとは異なるものとして記述されている。次に上記の引用の続きの文章を引用すると

当時コンスタンディヌポリは、小アジアとヨーロッパの海岸に散らばっている様々な街や郊外、そして村の混合物であった。そして街の各々、郊外と村の各々には、そこで大勢を占める人々に由来する土地々々の特徴と習慣、そして慣習があった。

ボスポロスのヨーロッパ側の海岸にはギリシア人と一般にヨーロッパ人が居住していたーメガ・レマ、ブユック・デレ、テラピア、これら全ての郊外はヨーロッパに似ていた。アジア側の海岸は東方【Ανατολή】であった。信徒たちにラマダーンであることを思い出させるためダウリが出ていた。そこでは、ムアッジンが日に三度定期的にアッラーが唯一であり、ムハンマドがアッラーの預言者なのだと語っていた。相対する立場にある者が向こう側の岸に到着した時には、別世界の御伽噺の喧騒にまで達したように感じることだろう。

金角湾の中にあったファナリは、未だギリシア的知性の中心であり続けていたが、初期頃の絢爛は失われていた[20]。

とあり、「相対する立場にある者が向こう側の岸に到着した時には、別世界の御伽噺の喧騒にまで達したように感じることだろう」に見られるように、これらから物語が始まっていく途上にある第一部第二章においては「トルコ・イスラーム・東方・アジア」と「ヨーロッパ諸国・キリスト教・西方・ヨーロッパ」という対立で描かれ、大事なこととしてこの対立においては、ギリシアは後者の中に入れられている。この「西方・ヨーロッパ」に属するギリシアという観点では、西方のギリシアは東方のトルコとは異質であり交わりのないものである。

本作においてトルコが前提無しにイスラームと関連付けられていることには注意が必要である。これはギリシア語の τουρκεύω という言葉の用法にも見られるものではあるのだが、例えば『現代ギリシア語辞典』においては「イスラーム教に帰依する」また「オスマントルコに支配される」という語の説明がなされる[21]。『ロクサンドラ』第二部三章においてもマクロホリからペラ向かう船中で、ロクサンドラがイスラーム教徒女性たちとハレムの中で過ごす場面において

> ギリシア語を話していたハヌムは立ち上がってロクムを差し出した。
> ーお食べなさい、ご婦人。ほとんどカイマックみたいですよ。
> ロクサンドラはロクムを取って手を止めた。「はぁ、どこの馬の骨とも知れないこの女だって元々はギリシア人【ρωμιά】だったのに、こうやってトルコ人になっちまったのよね【τούρκεψε】」と心の中で考えた。そしてこのハヌムにこう訊いた。
> ーどこでそんなに上手にギリシア語【ρωμέϊκα】を学んだの？
> ー私はクレタ人なんですよ、とハヌムが言った。どうぞロクムを取ってください[22]。

という描写があり、ハレムの中というイスラーム教の女性とロクサンドラしかいない環境での τουρκεύω という言葉のここでの使用を鑑みるに、トルコとイスラームの連想は自明のものとされている。ここまでをまとめると、トルコ人は「東方・アジア・イスラーム」に属して「西方・ヨーロッパ・キリスト教」とは対立し交わらない存在であるが故に、ギリシア人も西方に属するものとし

てトルコ人と対立していたのであった。

しかし第二の類型として指摘すべきこととは、作中のロクサンドラの日常生活には多くのトルコ人やアルメニア人、そしてその他の東方の人々が登場し、多くの交わりを持って共に生きたということである。第一の類型で見たようにロクサンドラが西方人・ギリシア人として彼らと全く交際しなかったのかと言えば、事態はその真逆である。例えば第一部八章には

> そして彼と一緒に声高に半分トルコ語、半分ギリシア語で世間話を始めた。
>
> ーねぇ、知ってる？あらら！知らないのね？すごいことなのよ。アダナで虐殺があったんですって。ほんと、何てことよね。虐殺って言ってるの、分からないの？また犬どもが起き上がって人々を殺してしまったのよ。どこかで手が使えなくなってしまえばいいのに、至聖女よ！
>
> ーわん！わん！わん！とアリーは煙草を巻きながら台所の扉の前にしゃがみこんで言っていた。
>
> ーわん！おまけにもう三回わん！女物の肌着が落っこちた。炎に襲われていた母親たちが再び鳴き声を上げた。犬、ハガルの子孫共の犬め！
>
> 庭師は決してロクサンドラにハガルの犬というが何なのか訊いてみようとはしなかったが、仮に訊いてみたとしてもロクサンドラにもこれが何なのかという明確な考えがなかった。
>
> 犬というのはもちろんトルコ人のことであったのだが、ロクサンドラにとってトルコ人はとても複雑な意味をしていた。トルコ人とは人類に対する鞭であり天罰であった。私たちがコレラ、地震、雷というようなものである。だがこういった事物がアリーや尻を追いかけていた女に逃げられてロクサンドラのもとにやって来て、バルクルの聖水を無心した卵売りのムスタファに対して何の関係があるというのだろう[23]？

という場面があり、「トルコ人一般」或いは「トルコというもの」に対して向けられる視線と生活を共にするトルコ人に向けられる視線が異なっている[24]。また上記で見た第二部三章における、マクロホリからペラへ向かう船中のハレムの中でイスラーム教徒女性たちと過ごした場面の最後では、イスラーム教徒

の女性たちが自身の子供の病気恢復のご利益を得るために正教の聖画にお金を貼ってもらうようロクサンドラに頼み、「ギュレ・ギュレ」と親しみの込められた挨拶で終わり、素朴な民間伝承の領域において民族や宗教による垣根が越えられている[25]。他にも第三部五章において

そして領事【在アテネのトルコ】に。

ーあなたは『アクロポリス紙』を読んでないの？どうぞ。『アクロポリス紙』を読んだ後で、あなたが人間なんだったら私の言いたいことが分かると思うわ。わからない？

ロクサンドラは立ったまま答えを待っていた。領事の額には汗がにじんでいた。ここかしこを見て、あたかも逃げ出す扉を見つけようとしているようだったので、おそらくは彼の中で何か大事があったのだろう。時計に目をやる。アマン、もう時間が遅くなってしまった。急ぎの仕事があるんですよ。お許しいただければ思います。ごきげんよう、また今度。

ーこら、ちょっと！おとなしく座っていると思ったら何があったのよ！領事の後ろに走り寄る。下まで見送りたかったのだ。

ーあなたはまた来ることになるでしょうね。何て言ったか聞こえた？

前に領事、後ろにロクサンドラと並んで息を切らしながら話して、話して、話している。

ーじゃぁ、キリストと至聖女【聖母マリア】の名にかけて安全に帰りなさい。何のことか分かるわよね？あなたのお母さんも奥さんもここにはいないんだからね！

ーアンネジイム、と領事は言った。私はトルコ人なんですよ。

ーふん、あなたがトルコ人だとして何だってのよ？私のベクチ【夜警】はトルコ人だったよ。卵売りもトルコ人だったわよ。でも二人ともいい子だったわよ！

そして領事の背中を打ちながら

ーがっかりしないで。あなたがトルコ人だって一向にかまやしない。あなたは人間じゃない。ギリシア人【Ρωμιός】、トルコ人、それが何だって言うの？！あなたは人間なの[26]！」

という描写も存在する。第一の類型で見た「ヨーロッパ人は一人もいなかったートルコなのだから。そしてスタヴロドロミにはトルコ人も誰一人いなかったーギリシア【Ρωμιοσύνη】なのだから」や「相対する立場にある者が向こう側の岸に到着した時には、別世界の御伽噺の喧騒にまで達したように感じることだろう」という描写とは対照的に、ここ第二の類型で見られるのは観念的な「西方・ギリシア」や「東方・トルコ」という区分と壁を超越した、日常生活の中でトルコ人を含む多民族の一つとして帝都を生きるギリシア人、そしてロクサンドラであった。「ロクサンドラにとってトルコ人はとても複雑な意味をしていた」のは確かであるが[27]、ギリシア人は「西方・ヨーロッパ」という枠で見ると「東方・アジア」のトルコとは異質なものとして描かれつつも、共通の習俗や日常を通して生活をトルコ人たちとそこに住まう諸民族の一つとして描かれるという、相容れない二つの性質を同時に持つ者として表象されている。そしてこの第二の類型で見た「習俗や生活の共通性」という観点が、第一類型で見た西欧人とギリシア人が同じ範疇に属すということを覆すことになる。

4-3. 西欧人

本節では、ギリシアがむしろヨーロッパ・西欧から区別されてトルコ・東方と同じ側に区分されるという、前節の第一類型で確認したのとは矛盾する状態が作中において描かれていることを論じたい。作中では、ギリシアと西欧の距離、或いは差異を意識させる描写が存在する。西欧とギリシアの差や区別に触れている第一部三章の描写から確認しよう。

> ヨーロッパ人【Ευρωπαίοι】たちは、東方の女性【ανατολίτισσα】が男たらしだなどと言う。東方の女性は男たらしなどではなく料理上手なのであり、だから外国人たちが東方に来ると心が離れがたくなってしまうものなのだ。礎石が台所の下にない家は、よい基がある家とは言えないだろう[28]。

ここでの東方の女性たちはギリシア人のみに限定されるものではなく、帝都に

生活するギリシア人を始め同じ食文化や習俗を共有するトルコ人やアルメニア人等も含むものであり、前節の第一類型におけるギリシアと西欧の位置づけとは反対に、この個所でギリシア人は明確に「東方の女性たち」というヨーロッパに対置される範疇に置かれている。他にも第二部四章において

【……】今ではベベカスも裕福になりつつあった。

－嗚呼！とエレガーキがため息をつく。私も子供を失くしてしまいそうよ、ロクサンドラ。あなたも子供を失くしてしまったようにね。

ベベカスはカラキョイで証券取引所を開き、努力して、その後銀行事務所を開いていた。もうハマムに行きたいとは思わなかった。家にトタンの風呂を運んで来て、部屋のバケツで湯を運んで水を入れていたのだった。「いいのかな……」。ただエレガーキの深い息だけが昔を思い起こすのみだった。

ベベカスはうずくまって湯船に入り、蛙のように座って身動きもできないでいる。

－猿真似だよねぇ、ロクサンドラ。猿真似よ。浴槽を洗ったのと同じ湯で顔を洗っているんだもの。

－ヨーロッパ人っていうのは随分と汚い人々なんでしょうね、エレニ。とても汚いって言ってるの、ひぃぃぃ。

ロクサンドラは手を震わせ、鼻をつまんだ。

－うぅ、レシュ[29]。

－私は子供を失ったのよ、ロクサンドラ。失ったの。もう私のことを受け入れてくれなくなってしまった……。こんな話はよしましょう、もう頭が一杯よ[30]。

の描写に見られるように、ここでは西欧（ヨーロッパ）の習慣を受け入れられない帝都人ロクサンドラと同じ世代に属する帝都人女性で親類のエレニが描かれている。他にも前節で一部を引用したが、第二部三章におけるマクロホリからペラに引っ越す場面では、ロクサンドラは船のデッキに上がって西欧人のように振る舞って到着を待つのではなく、トルコの女性たちと女性だけの旧来のハレムで過ごすことを敢えて選んでおり[31]、作中ロクサンドラと同世代の人々は西欧的な生活様式や振る舞いに理解できずそれを選ばないという描写がなさ

れる。

しかし、ロクサンドラやその世代の帝都ギリシア人が西欧化される生活や教育を受け入れられないで旧来の東方的な様式に留まろうとする一方で、同じ帝都ギリシア人でも子供や孫たちといった次の世代は西欧的なものを受け入れていく。第三部九章においては

> どこでこんな話を聞いたのだろう？私たちはどこで生活しているのだろう？ヨーロッパではあらゆる女性が自活していて、ギリシア【Ρωμιά】にも文明化の時が来る頃である。嘘は終わりだ。アンナは数年の後には学校に行って少しはフランスと英語を学び、自分自身と母親を養うため一刻も早く働かねばならない。アレカキスとクロードは翌九月よりアンナが現代的な女性になるようにスクタリのアメリカン・スクールで学ばせようと決心した。
>
> ー唾と鼻くそがなんだってのよ、え？何のことだかちっともわからない。
>
> ー母さんは何もわからなくてもいいんだよ。全ては子供のためだから！とアレカキスは言った。スクタリのアメリカン・スクールに通わせるよう手紙を書いている。
>
> ロクサンドラは心の中では「アマン」と言ったのだが、大声で「ふん！」と言っておいた。そしてエパミノンダスの船がいつ帝都に来るのかと何回も訊き始めたのだった[32]。

という描写がある。ここでもロクサンドラは孫に西欧式の教育を受けさせる意味や効能が全く理解できない。そして実際にイスタンブルのアメリカン・スクールに通い始めたアンナがロクサンドラに宛てた第三部十一章での手紙では

> 一週間後に初めてアンナの手紙の一通目がやって来た。手紙は「おばあちゃん」という言葉で始まり、喧嘩腰の大文字でつづられていた。残りはヒエログリフのようで、ガチョウ、鶏、犬、兎、真ん中には笑っているアンナ。口は耳まで達し、リボンには多大な情熱が込められてい

た。下には署名があり、追伸で「私を連れ戻しに来ないでね、おばあちゃん。ローストした肉とかパストゥルマなんて犬が食べてるし、もう送らないで。他の子たちも食べてるような、ミラティエの綺麗な紙に包んだケーキだけ送ってちょうだい」

ーまぁ！とロクサンドラは言った。

少ししてもう一度

ーまぁ！

この不幸な出来事の後、ロクサンドラは病気になってしまった。病は極めて重かった。あまりにも重かったのでクリオは医者を呼んだ。

医者は立ち去り際に首を振り、老婆が何歳なのかと尋ねた。八十五歳ですか？再び首を振った。「私たちもご婦人ほどの長寿を授かりますように」と言って立ち去ったのだった。食事制限を申し渡した。厳しい食事制限を[33]。

という描写がある。他にも第一部十二章においてロクサンドラの息子のアレカキスは、腹違いの兄のテオドロスとフランス人の妻の家で「垢ぬけるために」【για να εκπολιτιστεί】生活するようになって以来、「東方の文明から西方の文明に移行し」【πέρασε από τον πολιτισμό της Ανατολής στον πολιτισμό της Δύσης】たが故に、西欧的な生活や思考様式こそが優れていてロクサンドラのような東方的な様式は時代遅れで劣った様式なのだとみなすようになった[34]。ここに見られるように、東方に属するロクサンドラは西欧化されていく世代を理解できず、アンナやクリオの世代は西欧的な教育に順応していき、アンナにいたってはロクサンドラの在り方を古い物・遅れた物として拒否する姿勢さえ示した。

しかし『ロクサンドラ』においては、この西欧的でなく旧態依然としたロクサンドラが常にからかわれ、乗り越えられるべきで否定されるべき存在として描かれているかというと必ずしもそうではない。第三部六章における、アテネで過ごしている中で孫のアンナは学校に行かずにロクサンドラと共に過ごす場面においては、以下に見るようにそのロクサンドラの生き方に深い愛情と郷愁のまなざしが向けられている。

トゥルコリマノの漁師たちからアンナは鉤や銛、油汚れや砂州という

のが何なのかを学んだ。魚の名前を学び、前の晩から冬の北西風が吹いている時には、夜は夏の北東風が吹くということも知った。野菜がいくらであり、ラハノドルマデスを作るのに何オカの野菜が必要で、八百屋にはいくらの心づけを与えるべきなのかも学んだ。どうやってヤランジュ・ドルマを巻き、ズッキーニの詰め物をつくるのかも知った。靴下の破れを繕い、古着を細々と切って、布やカバーを作るために美しく組み合わせる術も学んだ。ここ最近は祖母にレースの装飾の編み方を教えてもらった。

アンナは祖母から他のこと、学校でもらった柘榴と菫で教科書には載っていないことも学んだのだった。どうやってそれぞれのものを味わうべきか、特にオリーヴの実や魚卵をどう味わうべきなのかを学んだ。雨と日差しも。生きること、見ることと聞くことを喜ぶことも学んだ。愛することを学んだのだった。

他の多くのこともアンナは祖母から学び、そうやって冬が過ぎた[35]。

後にアメリカン・スクールで近代・西欧的な様式を学んだアンナではあったが、この引用箇所では学校で教えられないロクサンドラの旧き良き生き方を「愛すること」だと表現されており、作中において決して古い物、乗り越えねばならない旧習だとして否定されているわけではない。

ここまで見てきたように、作中では「西欧化・近代化」のイデオロギーの中で生活や価値観の西欧化を受け入れることができるギリシア人とこれを受け入れることのできないギリシア人に分かたれている。ロクサンドラやエレニなどの古い世代、特にロクサンドラは東方的な生と価値観に従って生きていたが、子供たちの世代はアメリカン・スクールに通ったり、生活や価値観の西欧化に順応したりしており、「東方と西方」の対立の中にギリシア人の「世代対立」と「女性の役割」に対する考え方の違いが描き込まれていることになる。だが、この世代格差と女性の表象については稿を改めて論じることにする。

本節で見たように、作中でトルコ人に対して排除を表す第一類型と包摂を表す第二類型が存在することを論じたが、ギリシア人にとって同じく西欧人に対しても同様の第一類型と第二類型が存在することが明らかであろう。この時、ギリシア人と二者との関係は、トルコ人に対して排除の論理を働かせる時には、ギリシア人は西欧人と同じ西方の側に立ち、逆に西欧人に対して排除の論

理を働かせる時にはトルコ人と同じ東方の側に立っており、どの相手に対し自分を位置づけるかによって、西方的にもなり東方的にも振る舞いわけ、西方的でも東方的でもあるという矛盾を解消し、他者との関係によって自己の位置づけが変わるという特徴を示すことになる。

4-4. 本土ギリシア人

本節では『ロクサンドラ』に描かれるギリシア本土のギリシア人と帝都ギリシア人の間の差異に関する意識について確認し、本土ギリシアにおいても外国人であり、また故郷の帝都にあっても外国人である帝都ギリシア人の意識について論じたい。

ロクサンドラがギリシア本土のギリシア人と関係を持つ契機になったのは第三章二節において、帝都でギリシア人の置かれていた政治状況の困難さによりロクサンドラたちはアテネに引っ越す決心をする[36]。アテネ出発前の場面でも以下に見る同章同節では滑稽な形でアテネのギリシア人と帝都のギリシア人の違いを母ロクサンドラに説く娘の描写がある。

> この奔放さを恐れていたクリオは、帝都から出発する前に少しでもロクサンドラを落ち着かせておこうと努めた。アテネの人々は「間が悪い」なんて言わないと言っておいた。手で物を食べることもない。いちいち喜びを表現することもなければ、スルタンのハミトがカイザーを迎え入れる時にやったような、ピレアス港上陸ぐらいで仰々しく歓待することも無いのだ。
>
> ーちょっと、からかうんじゃないよ。だって、ヨルガキスの親戚が私たちを迎えに来てくれるんだし、その親戚だって三角帽と剣を持った大臣で海将なんでしょう？わかった？
>
> ーどうして剣を持ってきたりするのよ？
>
> ーそういうもんでしょ。持ってくるに決まってるわ。
>
> 「アマン」とロクサンドラは心の中で言った[37]。

実際、この後にロクサンドラたちを待ち構えていたのは本土ギリシア人たちの歓迎ではなく、厳重で事務的な税関の検査であり上記の期待は裏切られること

になった。アテネに着いた後のロクサンドラは、高名なアクロポリス神殿をトルコ語で「石の砦」呼ばわりするなど大きな関心を示すこともなく[38]、以下に見ていくように、殊に食べ物という生活の観点でロクサンドラはアテネが受け入れられず、ギリシアは外国であった。続けて第三部四節では、

> エレガーキ【帝都出身のロクサンドラの親戚】の家は、スタディウ通りとエルムー通りと一緒に最近になってやっと電灯のついたエオル通りにある。エオル通りは美しい通りだ。家は中央市場の近くにある。言っておくけど、これは大変便利なことなんだ！
>
> ただし、この中央市場では何も見つけられないことだろう。ここは何という場所だろう？メカジキを探してもありはしない。大きなムール貝を探しても見つからない。ドルマデス用に洋葱など言えば最後、笑われることになるだろう。アスマ・カバウが何なのかも知らない。パストゥルマも知らなければ塩漬けのカツオも知らず、何も何も何も知らない。だがあなたに言っておきたいことがある！何もない所からは何も出てきはしないということだ[39]！

この場面に見られるようにロクサンドラたちはアテネの食文化や生活の違いに当惑し、また他にも政治や社会の情勢を含め全てが西欧化していくギリシアでの生活が受け入れられなかった[40]。更に第三部五章においては

> カステラに家を買い、ロクサンドラは毎朝窓からサロニコス湾の塩辛い飲み物を満足げに啜っていた。マクロホリのような天国だ。神よ、光栄は爾に帰す！
>
> 寂しいベクチにいて欲しいと思う時だけロクサンドラは元気を取り戻した。朝はコーヒーを淹れてベクチとちょっと話そうと台所の敷居に座っていれたらなぁと思っていた。卵売りと水売りのイブラヒムにも会いたかった。ここの人々は神を畏れてはいない。十字架を侮辱し、バルクリオティサの聖水もそれが何であるのかさえ知らなかった。それに……今話しているここでも、皆しかめ面をしている。ロクサンドラは水売り

と友達になろうと思って出かけて行ったが、彼は疑り深くロクサンドラを見始めた。この男に恐怖を感じた。新聞売りにも同じ感情を抱いた。雇った女中のゴルフォはよく舌を出していた。洗濯女も同じだった。ここの人々には敬意というものがなく、気難しい。どこで肉屋に話しかけ、どんな肉が欲しいと言えばいいのだろうか！特にどうすればいいという考えも思いつかない。ある日悪魔がロクサンドラに腐った杏を持った八百屋を送り込んできたのだが、ロクサンドラが八百屋にバルタを手に取って何が起こるか見てればいいなんて言ってしまったもので、八百屋に自警団の人を呼びに行かれてしまった[41]。

という記述にあるように、昔の帝都での生活を思い起こしこそすれ、上記で見た食などの習俗に関することに加えてアテネにおける人間関係にも手を焼いている。また続けて六章において

ピレアスに来て三年も経たないうちにロクサンドラは、市長選挙に立候補すれば地区の皆が投票してくれるので、ダマラスだって打ち負かしていたのにと言われる程に人々に愛されるようになった。帝都出身の女性であり、地元の人たちが帝都出身者を嫌っていたにも関わらずだ。皆がロクサンドラに投票したことだろう。イドラの人を除いて皆がね[42]。

と描写されるように、ロクサンドラたちはアテネでの生活に馴染んできたとはいえ、この当時のアテネの人々は帝都ギリシア人を自分たちと違うものだと感じており、ロクサンドラの側でも結局アテネの生活や価値観の変化に馴染むことができず、経済的な事由が最後の引き金となってアテネを出立して故郷の帝都に帰ることになった[43]。ギリシア民族としては帝都のギリシア人も本土のギリシア人も同じギリシア人であるが、生活習慣や出身地の違いにより、ここでも帝都ギリシア人は『ロクサンドラ』作中において本土ギリシア人たちとは異なる存在として描かれるのだった。

前々節並びに前節で論じた第一類型と第二類型という構図で考えれば、まず第二類型としては、本土ギリシア人も帝都ギリシア人もギリシア民族という

枠組みに入るものであるが、第一類型としては生活習慣や習俗、そして出身地の違いによりどちらかというとヨーロッパ的な西方・本土とロクサンドラが帰った東方・帝都として区別される。畢竟するに、本土ギリシア人と帝都ギリシア人の関係は、第一類型でもってトルコ人や西欧人といった他民族と区別されて同じ側に属するものであるが、第二類型でもって「西方・本土」と「東方・帝都」という区分の中で彼我の区別がなされ、帝都人は生活習慣や習俗の観点で東方のトルコ人たちと同じ側に結び付けられることになる。ここでも、同じであるが異なるという事態が同時に成立している。

5. 本稿のまとめ

『ロクサンドラ』における帝都ギリシア人の置かれた位置、またトルコ人や西欧人といった外国人たちとギリシア人の関係には常に相反する要素が含まれていた。第一部十一章では「トルコにいる外国人少数派【μειονότητα】は、犬どもが有していたこのような特権を享受することがなかった[44]」と書かれている一方で、第一部十三章では「ギリシア人たち【οι Ρωμιοί】は十分に特権を得ていた。ロシアの庇護に伴うもの、イギリス首相のグラッドストンの庇護に伴うものもあった。したたかに生き延びて、地を富ませて支配することに成功していたのだった」と表現されている[45]。そして本稿で見てきたように、トルコ人や西欧人との関係に関しても、西欧とトルコのどちらの側に自らを位置づけるのかによって、帝都ギリシア人は「西方」でも「東方」でもあり得たのだった。

そして本作において帝都は十九世紀後半から二十世紀初頭にかけての帝都の料理やトルコ語混じりの帝都ギリシア語、そして昔の旧き良き帝都人の生活様式、そして「そこにトルコ人はいなかった」という第一類型的な表現を通してキリスト教・ビザンツ帝国の伝統を受け継ぐ「ギリシア人の街」として描かれた。しかしそれと同時に、同じ生活様式と習慣をもって共生するトルコ人やアルメニア人などの他民族の中で生きるという第二類型的な表現を通して「多民族共存の街」の街という、「一と多」という様相で見ると矛盾する姿も描き出されたのであった。この相互矛盾するはずの包摂と排除の要素を同時に持ちつつ他者との関係の中で違った発露をさせているところに、帝都ギリシア人のアイデンティティの特徴があるだろう。

加えて本作における第二類型を通して描かれるトルコ人への目線は、決して他者に向ける冷淡なものや排外的なものではなく、「ハミトの暴政のもとで

は、トルコ民衆がギリシア人【η ρωμιοσύνη】よりも自由なのだと言うことは誰にも言えない。故に、全民族が調和の中で生きていた」とも描写されるが[46]、本稿で確認してきたように帝都ではそれぞれの相互扶助と交流が織りなされ、そこでは人格を持った人間同士の交際があり、確かに他民族の共存が描かれていた。

このように、本作は文学作品として現代の本土ギリシアの生活では失われてしまったギリシア人の街や旧き良きギリシアの習慣や生き方を「郷愁」もって描きつつ、トルコ人や他の東方人との生活の中で描かれる「異国情緒」を同時に表現した作品であった。そしてこの共存の中で描かれる帝都ギリシア人像と隣人であるトルコ人への理解を通し、あまつさえアテネから立ち去るギリシア人を描くという点でもギリシア本土の観点が中心になって描かかれるギリシア・ナショナリズムのトルコ観とギリシア人観と異なるものでありギリシア人の捉え方に対して異なる観点を描き出している作品と言えよう。

参考文献

一次文献

Ιορδανίδου, Μαρία (2014) *Διακοπές στον Καύκασο*, Βιβλιοπωλείον της Εστίας, Αθήνα.

Ιορδανίδου, Μαρία (2019) *Λωξάντρα*, Βιβλιοπωλείον της Εστίας, Αθήνα.

Μήλλας, Ηρακλής (2018) *ο Οικογενειακός τάφος*, Εκδότης Γαβριηλίδης, Αθήνα.

Yerasimos, Marianna (2019), *İstanbullu Rum Bir Ailenin Mutfak Serüveni*, Yapı Kredi Yayınları, İstanbul.

二次文献

Αχλάδη, Ευαγγελία και Τσιλένης, Σάββας (Επιμέλεια) (2023), στο « *Η Λογιοσύνη της Πόλης -Εκπαιδευτικοί και λογοτέχνες της σύγχρονης περιόδου* », Εταιρεία Μελέτης της καθ' ημάς Ανατολής Σισμανόγλειο Μέγαρο – Γενικό Προξενείο της Ελλάδας στην Κωνσταντινούπολη, Αθήνα,

Κωσνταντινίδης, Κωνσταντίνος (2023) Μαρία Ιορδανίου: Η Αρχόντισσα του Οικουμενικού Θρόνου, στο « *Η Λογιοσύνη της Πόλης -Εκπαιδευτικοί και λογοτέχνες της σύγχρονης περιόδου* », Εταιρεία Μελέτης της καθ' ημάς Ανατολής Σισμανόγλειο Μέγαρο – Γενικό Προξενείο της Ελλάδας στην Κωνσταντινούπολη, Αθήνα, σσ. 172-177.

Κυριακαντωνάκης, Ιωάννης (2020) Η ελληνική λογιοσύνη της Κωνσταντινούπολης από τον Αλέξανδρο Μαυροκορδάτο τον εξ απορρήτων στον Μανουήλ Γεδεών, από το Κέντρο Μικρασιατικών Σπουδών, Αθήνα. （参考 URL：(20) Η ελληνική λογιοσύνη της Κωνσταντινούπολης. Εισαγωγή | Ioannis Kyriakantonakis - Academia.edu）

Μεταλληνός, Γεώργιος (2008) *Στα μονοπάτια της Ρωμηοσύνης -Σταθμοί στην ιστορική διαδρομή του ορθόδοξου ελληνισμού*, Εκδόσεις Άρμος, Αθήνα.

Νούτσος, Παναγιώτης (1999) Ο Μάρκος Ρενιέρης ως πολιτικός διανοούμενος, του Μάρκου Ρενιέρη στο *Φιλοσοφία της Ιστορίας -Δοκιμίον*, Μορφωτικό Ίδρυμα Εθνικής Τραπέζης, Αθήνα, σ. IX-XXXVI.

Demirözü, Damla (2015), *İşgal Direniş İç Savaş: Yunan Edebiyatında II. Dünya Savaşı Yılları*, İstos Yayınları, İstanbul.

Nikoloupoulou, Maria (2007), Space, Memory and Identity: The Memory of the Asia Minor Space in Greek Novels of the 1960s in “CAS Working Paper Series”, (1), the Centre for Advanced Study Sofia, Sofia, pp. 3-18.

川原 拓雄 (2004)『現代ギリシア語辞典［第三版］』リーベル出版.

澁澤幸子 (2009)『だから、イスタンブールはおもしろいー歴史的民族都市の実感的考察』藤原書店.

村田菜々子 (2013)「近代ギリシアにおけるヘレニズム概念について」法政大学言語・文化研究センター編書『言語と文化』第十巻、pp. 181-205.

---

[1] 村田, 2013, 189-190

[2] Μεταλληνός, 2008, 48

[3] 1453 年のビザンツ帝国崩壊以降に帝都に残されたギリシア人共同体の文学活動に関する研究には、イオアニス・キリアカンドナキスの「アレクサンドロス・マヴロコルダトスからマヌイル・ゲゼオンにいたるコンスタンディヌポリのギリシア文学」（2020）やエヴァゲリア・アフラディとサヴァス・ツィレニス編集『帝都文学ー現代の教育者と文学者』（2023）という研究が挙げられる。

[4] Νούτσος, 1999, XXVI

[5] 現代の実例として渋沢（2009）には帝都ギリシア人で自分たちを「ルーム」と呼称して本土のギリシア人を「ユナンル」と呼称する人物と会って会話した自身の体験が紹介されている（渋沢, 2009, 51-52）。

[6] Demirözü, 2015, 16

[7] Μήλλας, 2018, 47

[8] Μήλλας, 2018, 48-49

[9] Κωνσταντινίδης, 2023, 173

[10] Κωνσταντινίδης, 2023, 175

[11] Ibid.:『コーカサスでの休暇（Διακοπές στον Καύκασο）』は、前作『ロクサンドラ』に登場したロクサンドラの孫のアンナが主人公であり、アンナのコーカサスとロシアでの冒険が描かれている。前作で登場したロクサンドラやアガト、またアレコスなどが引き続き登場人物として登場しており、コンスタンティニディスは『ロクサンドラ』よりも本作の方がアンナと著者のヨルダニドゥの一体性が明白に描かれていると指摘している。

[12] Κωνσταντινίδης, 2023, 173

[13] Κωνσταντινίδης, 2023, 175: 『狂った鳥のように（Σαν τα τρέλα πουλά）』も前作と前々作と同様に主人公は同一人物のアンナである。戦間期のギリシアの出来事を描きつつも、帝都のアメリカン・カレッジやコーカサスでの思い出が描かれるとともに、祖母ロクサンドラや母クリオ、また他の家族とのつながりと回想にも触れられている。

[14] Κωνσταντινίδης, 2023, 173

[15] Κωνσταντινίδης, 2023, 175:『サークルの手紙において（Στου κύκλου τα γυρίσματα）』ではもはやアンナは主人公ではなく、マリアを主人公として三人称で展開される（マリアの夫の名前はヨルダニディス）。マリア・ヨルダニドゥの家族の中での出来事や変化が描かれ、特筆すべきこととして『ロクサンドラ』を執筆するマリアその人が登場する。前三作との関わりとしては、それら三作品の時代設定と重なる過去も描かれ、またソヴィエト大使館に勤務するアンナが登場している。

[16] Ibid.: 『私たちの庭（Η αυλή μας）』は一人称で書かれた明確に自伝的な作品である。1963 年から 1980 年の彼女の事績が中心になって記述されてはいるものの、先行する四作品が発展する形も採られている。

[17] Ιορδανίδου, 2019, 37

[18] Ιορδανίδου, 2019, 58-59

[19] Ιορδανίδου, 2019, 18-19：他にもタターヴラ地区について「タターヴラは、ギリシア人が人口の百％を占めていた帝都唯一の郊外であった。あなたがトルコ人にどれほど懇願してみたところで、タターヴラに足を踏み入れようとすることもできなかっただろう」という描写もなされる（Ιορδανίδου, 2019, 37）。そして同じ個所によるとこのタターヴラでは「あらゆる旧い習慣が保たれていた」。

[20] Ιορδανίδου, 2019, 19

[21] 川原, 2004, 530

[22] Ιορδανίδου, 2019, 114

[23] Ιορδανίδου, 2019, 46

[24] 例えば第二部五章においてロクサンドラは「ロクサンドラはトルコ人を恐れていたようにクルド人をも恐れていた。木材を切ってもらいに呼びつけた時でもーあ！全部ね、全部！ーと言うだけで親しく交わろうとはしなかった」とは思うものの、実際には「だ

が、奇怪なことに、ロクサンドラにはクルド人たちが悪い者のようには見えなかったし、便宜も図ってくれた。倉庫に薪を入れてくれて、その晩の別れの挨拶も『ギュレ・ギュレ』のようなもので、『良き冬』のためにお互いに祈り合い、それに心づけと包みという心のこもったものだった。『これは子供のために、そいつは奥さんに持って行きな』。そして他にも色々」とあるように東方の人々に属するクルド人とも親しく交際している（Ιορδανίδου, 2019, 140-141）。

[25] Ιορδανίδου, 2019, 118

[26] Ιορδανίδου, 2019, 204-205

[27] ロクサンドラの中でも、もちろん克く勝つ将帥、つまり至聖女が獰猛な犬たちから帝都をいつの日にか救ってくださるということは知っていて、ロクサンドラは、至聖女が砦の上にまっすぐと立って哀れな住民とキュチュクス【小さき者たち】をチャタルジャから降りて来る怒り狂った獰猛な犬どもから守ってくださる姿を想像していた」や「イエス・キリストがあらゆる悪に打ち勝ってこれを散らされる。バルクリオティサ、あなたの手を差し伸べて私の猫をさらった獰猛な犬たちから帝都をお救い下さい！」という気持ちがありつつも（Ιορδανίδου, 2019, 66-67）、第二部六章で本土のギリシア人たちが帝都をギリシア領にしようとしている報せを聞いた娘のクリオが「ギリシア万歳」と歓喜した一方でロクサンドラ自身は「黙りなさい」や「ふん、あの人たちが帝都を取ったらさぞかしいいことでしょうよ。ほら、スルターナ、走って燭台に火を付けなさい」と言うだけで実際に帝都のギリシア領編入にされることに関してはナショナリズム的な振る舞いはしなかった（Ιορδανίδου, 2019, 148-149）。

クリオは立ち上がり、エパミノンダスの首元に飛びついた。

ーギリシア万歳！と叫んだ。

[28] Ιορδανίδου, 2019, 22

[29] λέσια：トルコ語では leş 表記。動物の死体や死骸の意味。

[30] Ιορδανίδου, 2019, 126-127

[31] Ιορδανίδου, 2019, 114

[32] Ιορδανίδου, 2019, 236-237：尚、『ロクサンドラ』の続編でアンナが主人公である『コーカサスでの休暇』においては、ロシアに到着したアンナは叔父の妻のマダム・クロードやマダム・フローの勧めによってイギリス人のミス・エニ・ドラパースになりきってロシア人の子弟に英語を教えて現地での生計を立てていくことになる。この時、アメリカン・スクールに通ったとはいえイギリス人でもミス・エニ・ドラパースでもないのでロシア人にイギリス人のふりをして英語教師をすることを断ろうとするのだが、マダム・フローは日々のパンを稼ぐためにはアンナは中国人にでもなれるはずであり、経済的独立を手にするためにはイギリス人にならねばならないと諭す。実際アンナはイギリス人になりきって独立した生計を立てていく（Ιορδανίδου, 2014, 78）。ここにおいて、帝都人でありアメリカン・スクールに通ったアンナは、イギリス人やフランス人の集団の中で生活し、ロシア人という東方人に対し英語を教えるという立場を取っている。

[33] Ιορδανίδου, 2019, 241

[34] Ιορδανίδου, 2019, 75-76

[35] Ιορδανίδου, 2019, 216

[36] 件の場面は次のとおりである：

ロクサンドラは震えながらエレガーキとの別れの日が近づいて来るのを見ていた。或る日エレガーキがこう言った。

ーもうヨルガキスの船だって帝都に来くることはないんだから、あなたたちもどうしてアテネに定住する決心がつかないの？

クリオが飛び上がって、その口に接吻した。

ーそう言ってあげてよ、エレニおばさん。そう言ってほしいのよ！手で机を打って再びこう叫んだ。私は子供を連れてアテネに行くわ。昔みたいにアルメニア人に対して弾圧があったり目の前で子供が虐殺されたりするようなトルコになんか住んでいたくなんてないもの！

そうだった。クリオが二度目を言う必要はなかったのだ。無論皆がロクサンドラを急いで捕まえた（Ιορδανίδου, 2019, 186）。

[37] Ιορδανίδου, 2019, 188-189

[38] 2019, 189-190：件の箇所は次のとおりである：

手回しオルガンがププラを演奏していた。

ほら、オリンポスのゼウスの柱の近くにベンチがある。

ー誰の？

ーオリンピアのゼウスのよ、ロクサンドラ！

ーうーん！わかった。あの上のタス・クシュラは何だい？

ーアクロポリスよ。行ってみたい？

「アクロポリス」と聞くとロクサンドラはタターヴラにあった喫茶店を思い出してため息をつく。

ーどこ？と上の空にエレガーキに質問した。あの上よね？

ーそうよ。

ーあなたは行ったことあるの？

ー私はまだ気がふれたりしてないわ。

ーじゃぁ、あんなものは無視しちゃいましょう。

[39] Ιορδανίδου, 2019, 192

[40] 第三部五章において選挙の街頭演説を、帝都で見たアルメニア人虐殺の争乱や影絵芝居と勘違いする描写、また街頭演説を行う立派な身なりをした政治家に対して過去に搾取を受けたとして人込みの中で暴れる女性などが描かれる（Ιορδανίδου, 2019, 197-200）。他にも同じギリシア人の中で「政治的な理由によって」マニ人とクレタ人が争っている中、ロクサンドラはクレタ人をキュルト人（クルド人）と聞き間違えてまたギリシアでもクルド人によって危害を加えられるのではないかと恐怖する描写が存在する

（Ιορδανίδου, 2019, 200）。こういったギリシアでの新しい選挙が始まっていくという政治的な状況に対して、娘には「政治的な理由でって言ったの。嗚呼、お母さん、今はこの話をよしましょう。だってお母さんにはわかりっこないんだもの」と言われるなどロクサンドラは全く理解することができず、ロクサンドラは当時のギリシアの選挙や政治状況を戯画化するための道化ともいうべき役割を果たしている。

[41] Ιορδανίδου, 2019, 193-194

[42] Ιορδανίδου, 2019, 212

[43] Ιορδανίδου, 2019, 217

[44] Ιορδανίδου, 2019, 67

[45] Ιορδανίδου, 2019, 79

[46] Ιορδανίδου, 2019, 79-80